

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局

〒810-0003 福岡市中央区春吉

1-16-8 VEGA天神南601号

TEL 092(731)2372

FAX 092(731)2373

No.168

2026年6月24日

〈URL〉 <https://www.peshawar-pms.com/> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



〔写真〕 工事現場の昼休み。持ち寄ったご飯をシェアして食べる作業員たち（2026年4月25日）

出発点としての現在を考える **2025年度現地事業報告**

村上 優／PMS 支援室

2025年度会計報告

ペシャワール会事務局

現地からのレポート 期待を集めるマーマンダラ事業

山下 玄

活動を始めたハンセン病センター

ハフィズラー カニ

種を蒔く人

アブドゥル バシール シャリフィ

持続可能な発展の生きた証

ポーパル ハミディ

理事就任のご挨拶 自立への伴走者として

中山博喜

◎中村哲医師アーカイブ アフガニスタンから命問う ―現地活動30年時のインタビュー

中村 哲

◎カラー報告 維持管理事業 バラコットの5月

ナージアン事業、いよいよ大詰め

農業事業

新規事業地マーマンダラ

【PMS職員紹介】若手技師たち

【カラー連載】中村先生 雨ニモ負ケズ―ハンセン病診療への想いが叶う

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のペシャワール(パキスタン)での医療活動を支援する
目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS(平和医療団・日本)のアフガニスタンでの医療活動
や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶



平和は月の滅びるまで輝くべし

沙漠の朝雨^{けいじん}を潤す 耕田^{こうきょ}溝渠柳色新たなり
百論巷間^{こうかん かまびす}に喧しきを聴けど 郷民何を計って心安めるを得ん
刀剣を以て和を成すは能^{あた}わず 糊口^{こうこう}を相^{しの}凌いで天を仰げば
神意^{きんい}は煌いて一隅^{いちぐ}に顕^{あら}わる 願^{ねん}わくは此永代^{これ せんべん}の先鞭^{せんべん}たれ
平和は月の滅びるまで輝くべし ——中村 哲（「開拓地に寄せる」）

出発点としての現在を考える

2025年度現地事業報告

PM S（ピース・ジャパン・メデイカルサービズ）総院長 村上 優／PM S支援室

はじめに

この一年、二〇二五年度を振り返ると、長い時間が経ったような気がする。

PM Sとペシャワール会の事業は、中村哲医師の希望を確実に継続し、具体的に進んでいるが、立ち止まって考えてみると奇跡のように感じられる。一〇〇名以上のPM Sスタッフ、ナンガラハル州の地元の人々、財政をすべて支えているペシャワール会の会員・支援者、そして事務局スタッフやPM S支援室・技術支援チームのメンバー。それらの何一つ欠けても立ち行かなかった。中村哲の精神に共感し、継承しようとする人々が存在し、またその存在が将来に引き継がれていくだろうことが確信できた一年だった。

二〇一九年十二月に中村が亡くなって七年目の、私たちの到達点であり、出発点でもある。

アフガニスタンの現状

私たちが把握できるのはあくまでPM Sが活動する東部アフガニスタン、それもナンガラハル州の現状である。二〇二一年にタリバン政権が復活して以来、国内の治安は安定しているが、パキスタンとの対立が、二〇二五年夏以降、特に二六年一月より高まり、一部で交戦が報じられている。ただし、現地事業を進めているエリアでは治安は維持されており、事業には支障がない。

タリバン政権（アフガニスタン・イスラム酋長国）としての法制度の整備が進んできており、様々な許認可権限が州政府から中央政府に移行されているが、それを実行する行政能力は高くはなく、申請しても多くの時間を要する。実際は州政府レベルの了解で水路工事もハンセン病センターの開設も実行できているが、それも中村医師がこの地で成し遂げた実績あってこそ可能となったことを忘れてはならない。



ナージアン（ホラガイナウ）の完成間近の砂防堤（2025年12月22日）

アフガニスタンは最貧国の一つで、飢餓線上の人々は多く、食糧支援の必要性が国際機関より報じられている。政府は農業自立の方向で大規模プロジェクトを打ち出し、アフガニスタン北部のアムダリア河のコンシユテバに大きな用水路を建設中で、他の地域でも建設計画を打ち出している。ただこうして造られる用水路の実効性への疑問や、周辺国との上流下流問題（水争い）での紛争の恐れも大きい。

アフガニスタン東部では、ヌールガルからクナル河の水を、カブール河に造られ

ているドロントダム（一九六〇年代にソ連が支援して建設。用水路がジャララバード以東を潤す）に注水する大規模灌漑計画を政府が発表したため、PMSはこの地域で調査していたPMS方式灌漑工法を用いた計画を中止した。

一方、州政府はドロントダムの水が減ったことへの対策についてPMSへ意見を求めてきた。カブール河はインダス河に注ぐ国際河川であり、周辺国との緊張が高まるために、PMSとしてはその動きに同調することは避けた。

かようにタリバン政権はアフガニスタンの再建に取り組んでいるが、安定した国の運営には長い時間が必要と感じる。日本であれば徳川幕府ができたころと似ている。徳川幕府はまずは自らの秩序、法制度を作り文化を発展させていき、三百年を経て近代へ移行した。中村は是々非々で注意深く判断し、PMSとして実行可能な事業を確実に、しかも静かに進めることに専念し、それが人々の生活の安定につながった。

地球温暖化と「緑の大地計画」第二章

中村は、アフガニスタンが減びるのは戦争ではなく、温暖化による気候変動（干ばつと予測不能なゲリラ豪雨で滅びると、繰り返し訴えていた。二〇〇〇年に顕在化して以降、干ばつは悪化の一途をたどっている。アフガニスタンはヒンズークシユ山脈を

中心に山地が広がる国である。「金はなくても生きていけるが、雪がなければ生きていけない」という古来の言い伝えを、中村はいつも引用していた。雪解け水こそが農業の源泉であった。一九七八年、中村が登山隊付きの医師として、ヒンズークシユ山脈最高峰のティリチミール（七七〇八m）を訪れた時は雪線（万年雪が残る高さ）が三千mであったが、現在は四千mに上がってきている。日本では貯水の役目を森林が担っているが、アフガニスタンでは森林帯は国土の二%を切ったと報告された（二〇二六年アフガニスタン国家環境保護庁）。

中村は「緑の大地計画」を掲げ、万年雪や氷河を源にする大河から水を引く技術を中心としたPMS方式を十五年の歳月をかけて完成させた。しかも当初の計画時に、高山の雪に頼ることのできない中小河川流域の灌漑も発案している。

現在アフガニスタンでは、万年雪をいただくエリアは大幅に縮小してきている。ナングラハル州でも、パキスタンとの国境をなすスピンガル山脈は主に三千〜四千mの山々で、この山脈に端を発する中小河川流域は干ばつにあえいでおり、多くは涸れ川で普段は水が流れていない。こうした地域では、春から初夏にかけての雪解け水やゲリラ豪雨による洪水（最近では四月にも多く見られる）の貯水か、カレーズ（地下の横井戸）で水を引くか、とどこどこにある小規模

表 1 2025 年度診療数及び検査件数

地域名	ナンガラハル州
施設名	ダラエヌール診療所
外来患者総数	52,437
【内訳】 一般	44,925
てんかん	763
結核	48
マラリア	3,379
外傷治療総数	3,322
入院患者総数	—
検査総数	7,943
【内訳】 血液一般	646
尿	1,365
便	1,536
抗酸性桿菌	128
マラリア	3,460
リーシュマニア	380
その他	428

*2025年11月1日開設

地域名	ナンガラハル州
施設名	ドクター中村記念ハンセン病センター
外来患者総数	196
【内訳】 ハンセン病	0
接触者診察	20
紹介患者	61
他機関訪問診察	115
入院患者総数	—
検査総数	26
【内訳】 血液一般	15
ハンセン病塗抹検査	8
その他	3

な湧水を集めるしかない。雪線が三千mだったころは、地下水が多く蓄えられていたの、カレーズはアフガニスタンの水利用の中心であった。

パシトゥ語では大きな谷を「ダラ」、小規模な谷を「ナウ」というが、ゲリラ豪雨の水を浸透させる目的で、ナウに砂防堤や溜池をつくり地下水を涵養することを中村は提唱していた。PMSが二〇二四年に完成させたスピンガル山麓のバラコットや、本年九月に完成するナージアンでの灌漑方式がこれにあたる。

ナージアン完成後の次期事業として隣接地のマーマンダラで同様の灌漑を行う予定で調査が始まっている。このマーマンダラでの建設過程を記録し映像化して、その有効性を評価しモデルとして提示することを計画している。

日本でも古代から多くの溜池が造成されて今に至っている。アフガニスタンでも今

後も長く農村部に定着し、農民が自ら参加し、維持できる方式である。これが、「緑の大地計画」第二章「流域貯水（溜池）」である。また、隣接する国との争いを回避できる唯一の方法と言えよう。

PMSの事業を継続するために

二〇二五年十一月にドクター中村記念ハンセン病センターが開設され、医師・看護師たちが研修に努めてきた。東部アフガニスタンを診療圏として考えているが、まずはナンガラハル州での活動を主にして患者が見つければ、ハンセン病の診療を必要とする人々と出会う糸口をつかむことになる。二〇二六年になって五名が確定診断でき、実質的なハンセン病センターの働きがいよいよ開始された。

PMSとペシャワール会は「中村哲医師の事業は全て継続し、中村哲医師の希望は全て引き継ぐ」を肝に銘じて、歩み始めた。

温暖化も、新たな戦雲も急を告げるなかで、PMS事業は安定して活動できており、それを支える日本側のペシャワール会も次世代へ手渡す準備が始まった。

中村医師の事業に共感を寄せて支援し、活動に参加いただいた会員・支援者の方々に心からの感謝を申しあげますとともに、一層のご協力をお願いします。

二〇二五年度の概要

1. 医療事業

◎ダラエヌール診療所

隣国からの難民強制帰還は継続されているが、トルハム国境に数団体による診療所が置かれたことで二四年度に急増していたマラリアと疥癬患者は減少してきた。ダラエヌール診療所は、上流に郡立の病院が開設されたにもかかわらず、この地域で重きをなしている。

二五年は地震被災地への緊急支援やその後の断続的な支援に診療所職員も参加した。ハンセン病センターの体制作りや新職員トレーニングのため主要職員異動により、診療活動がやや揺らぐときもあったが、協議を重ね現在は通常の診療体制となった。

◎ドクター中村記念ハンセン病センター

二五年十一月一日に開設。現在職員はハンセン病について学習を重ねつつ、一月か

表2 堰の建設及び改修の経過と予定

表2 堰の建設及び改修の経過と予定			施工・実施期間										維持管理期間								
堰の名称	場所	水路(km)	'03~'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	'25	'26		
マルワリード	クナール州 ジャリババ	27	堰 造成					沈砂 池 改修	主幹 排水路 建設	取水門 改修	再 ライニング 約1.5km	排水路 シギ分岐	A区 洪水橋周辺の 整備 E区 洪水橋拡張	再 ライニング 2km	再 ライニング 3km	取水門増設、コンクリ ート製土砂吐設置					
シェイワ	シェイワ郡 カンレイ村	0.5	堰 造成													堰上流の堆積 土砂除去、堰補修					
カマⅠ	カマ郡・上流域	0.35	堰 造成								堰 改修	堰補修、 対岸護岸 一部補修		堰補修、 対岸護岸 一部補修	堰補修		堰補修				
カマⅡ	カマ郡・下流域	1.05		堰 造成						堰 改修				堰補修、 対岸護岸 一部補修	堰補修		堰補修				
カシマバード	ベスード郡 カシマバード村	0.25		堰 造成									堰補修		堰上流の 堆積土砂除	河道 整備	堰補修				
タブー	ベスード郡タブー	0.7		堰造成				廃止、ミラーン堰に統合													
カシコト	シェイワ郡 カシコト村	2.5			堰 造成							護岸 一部補修	護岸 一部補修		護岸 一部補修	護岸 一部補修	護岸 一部補修	護岸 一部補修			
ミラーン	ベスード郡 ミラーン村	0.3				堰 造成						護岸 一部補修		堰補修	堰上流の 堆積土砂除	護岸 一部補修	堰補修	護岸 一部補修	護岸 一部補修		
シギ	シェイワ郡シギ村	0.35				堰造成								河道整備			河道整備	河道整備			
マルワリードⅡ (カチャラ)	シェイワ郡 カチャラ村	5.5						堰 造成	全域 送水	排水路網と植樹、 護岸造成			堰補修		護岸 一部補修	護岸 一部補修	護岸 一部補修	護岸 一部補修			
バル カシコト	シェイワ郡 バルカシコト村	0.3									既存堰 改修	測量	堰造成	用水路、 沈砂池造成							
バラコト	コット郡 バラコト村	5												測量、着工	堰造成		護岸 一部補修	護岸 一部補修			
タンギートク チー	ベスード郡 タンギートクチー村		河道 整備													用水路 補修	河道整備	河道整備			
モラヘイル	ナージアン郡 モラヘイル村	2.17															測量、 着工	用水路、 沈砂池 造成	用水路 造成		
新規事業																			測量、着工		
FAO 共同事業									ミラーン 訓練所建設	PMS方式 訓練	訓練・候補 地調査	候補地 調査	候補地 調査	候補地 調査							
JICA 共同事業			カマ堰・カシマバード 堰、ベスード護岸	カシコト堰	ミラーン堰	カチャラ堰	共同調査・ガイドライン作成														

※2019年度からのマルワリード堰改修計画は工期を2024年12月まで延長。

※シギ、シェイワ堰については河道移動を観察、将来必要となればマルワリード堰流域に統合。

※カチャラ堰(マルワリードⅡ)は2016年10月から2018年9月までJICA共同事業、2018年10月からベシャワール会単独資金による事業。

※ナンガラハル州政府から要請があり、タンギートクチー用水路の補修工事を行った。

らアフガニスタン
東部の州立、郡立
病院や個人診療所
一三八カ所を訪問
し、ハンセン病の
診察法を伝えなが
ら関係を構築中で
ある。現在までに
五名の未治療のハ
ンセン病患者が入
院治療を受けた。
二〇二五年度の
診療内訳は表1の
通り。

2. 灌漑事業

二〇二五年度の
主な工事は以下の
通り。
(1) ナージアン事業
モラヘイル用水
路に沈砂池が造成
された。
カチコール湧水
とミアガン湧水を
それぞれの既存用
水路へ導水する工
事が終了した。両
既存用水路のソイ

ルセメントによるライニング工事や整備も
終了。バゴン湧水の導水工事を残すのみと
なった。ホラガイナウに砂防堤が造成され、
現在ギーダルナウに同様の砂防堤を造成中。

(2) 維持・管理(保全)事業

二五年度は以下の補修・改修工事が行わ
れた。洪水期の大きな被害はなかった。

・昨年八月三日のスピンガル山系方面で
の集中豪雨(三四mm)による鉄砲水により、
バラコト堰上流に大量の砂利堆積及び
堰上流右岸の護岸堤の一部が流失したた
め補修工事を実施。

・カシコト取水門前の砂利堆積除去作業。
取水門上流に川に突き出して設置されて
いる船着き場が、利用者によって踏み固
められ石出し水制の役割を果たしてしま
い、護岸線に沿って下流側の取水門近傍
まで大量の砂利堆積が発生したため。

・マルワリードⅡ堰上流の河道変化で堰へ
の流量が減少したため、上流で河道整備。
・護岸堤補修工事…ミラーン取水門より下
流側約三〇〇〜六〇〇m、また後日約四
〇〇m地点から四〇〇mにわたり、護岸線
に洗掘が発生し補修。マルワリードⅡ護
岸線四千m、五千m、六九〇〇m地点の
石出し水制を補修。

3. 農業事業—ガンベリ農場

二四年度に引き続き、救荒作物のサツマ
イモの試験栽培と普及作業が行われた。二



ミラーン堰下流の護岸補修工事（2026年3月2日）

五年度は一千kg以上の収穫があった。普及用のツルの生産量を増やすために自前で小ぶりのビニールハウスを作り、一月に種芋の伏せ込みを試みた。

ガンベリ農場では例年通り小麦、米、柑橘類、ナツメ、豆類、サトウキビ、玉ねぎなどの栽培を続行。二五年度は未開墾地の5haが開墾された。

◎植樹

二〇二五年度の植樹数は一万一六一二本。二〇〇三年以来の総植樹数は約一三四万本となった。植樹の内訳は表3の通り。

表3 植樹本数(2025年度)

種類	場所	'25年4月～ '26年3月	'03年～'26年 3月の累計
ヤナギ	用水路の両側、河川工事	1,650	849,668
クワ	用水路土手	10	23,333
オリーブ	用水路土手、オリーブ園	0	6,115
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	1,930	184,370
ピエラ	ガンベリ沙漠	500	5,543
ガズ	砂防林	0	140,278
シーシャム	護岸樹林帯	0	33,430
ポプラ	ガンベリ沙漠	0	17,756
ハウチワキ	モスク、学校、公園	2,000	9,408
果樹	ガンベリ果樹園	3,646	55,465
その他		1,876	14,370
		11,612	1,339,736

4. 現地との交流・その他

日本人メンバーの現地滞在により、現地職員や地域住民との交流が重なり、PMSの事業への理解がさらに深まった。政権が変わるごとに行政への手続きや事業報告書の様式等が変更される。それに対応する複雑な作業を、支援室メンバーとPMS職員間で共有し対策を講じられるようになったことは大きな進歩と言える。また、技術支援チームによるPMSのエンジニアたちとの技術の共有・指導と、充実した一年であった。活動地域の行政との関係も良好である。

二〇二六年度の計画

二〇二五年度の連続である。

◎灌漑事業

①ナージアン事業ではギーダルナウの砂防堤造成の工事の終了をもって完工となる。
②維持・管理（保全）計画は、流域住民への技術伝達の一環として継続され、住民による維持・管理を目指す。

③PMS方式の普及…建設現場では、従来通り地域住民を作業員として雇用することで、彼らによる水利施設の維持管理を目指しトレーニングを継続。PMSに採用された若手エンジニア達への現場でのトレーニングも続行。

④新規事業…二〇二六年十月に着工される「チエルガジ（マーマンダラ）事業」の調査を続行。

◎農業・医療事業

農業事業では、サツマイモ栽培の研究、普及を継続。

医療では、行政や他医療機関との関係構築を図り、ダラエヌール診療所の継続及びハンセン病診療の充実にむけて職員の研修を併行しながら患者の早期発見・早期治療に力を入れる。

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをを送りただければ幸いです。会報発送等に使わせていただき大変助かります。なお、外国の切手はお受けしておりません。

2025年度の主な収支

期間 2025年4月～2026年3月

一般会計 (単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	601,768,872 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	2,376,674 ②
4 収益事業収入	9,538,748 ③
年度収入計	613,684,294
いのちの基金より繰入	140,000,000
前年度繰越	59,150,614
収入計	812,834,908

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	5,326,699
DVD売上	885,180
カレンダー売上	15,095,200
雑収入	2,980,872
売上収入計	24,287,951

[経費の部]

書籍等原価	10,073,262
販売費	1,319,741
事業所税等	3,356,200
経費合計	14,749,203
収益事業収入	9,538,748

「いのちの基金」残高

期首残高	2,040,000,000
一般会計に取崩	-140,000,000
一般会計から繰入	250,000,000
期末残高	2,150,000,000

[支出の部]

1 現地協力費	456,216,460
PMS運営協力費	24,660,892
アフガン事業費	271,531,460 ④
地震被災地支援	137,645,000 ⑤
ワーカー費	1,638,653
渡航費	20,637,203
国内活動費	103,252
2 広報費	23,312,995 ⑥
3 事務局費	27,593,274
年度支出計	507,122,729
いのちの基金に繰入	250,000,000
次年度繰越	55,712,179
支出計	812,834,908

- ① 会員・支援者からの会費・寄付金
(個人25,532件,団体842件)
② 利息・雑収入・為替差益
③ 収益事業会計から
④ 農業用灌漑用水路建設等
⑤ アフガン東部地震被災地支援
⑥ 会報印刷・送料等

2025年度ベシャワール会決算監査報告

2026年6月1日に決算監査を実施いたしました。監査方法は、担当より事情を聴取しながら、決算報告書をもとに審査しました。その結果、適正であることを認めます。

2026年6月1日 ベシャワール会監事

美谷川成孝

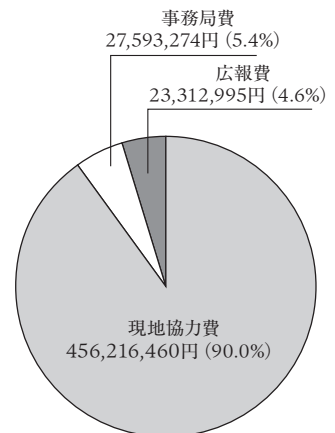
未使用切手、書き損じ葉書の寄付

寄付いただいた件数	574件
未使用切手枚数	47,969枚
同 金額	2,696,611円相当
書き損じ葉書枚数	17,017枚
同 金額	892,720円相当
合計金額	3,589,331円相当

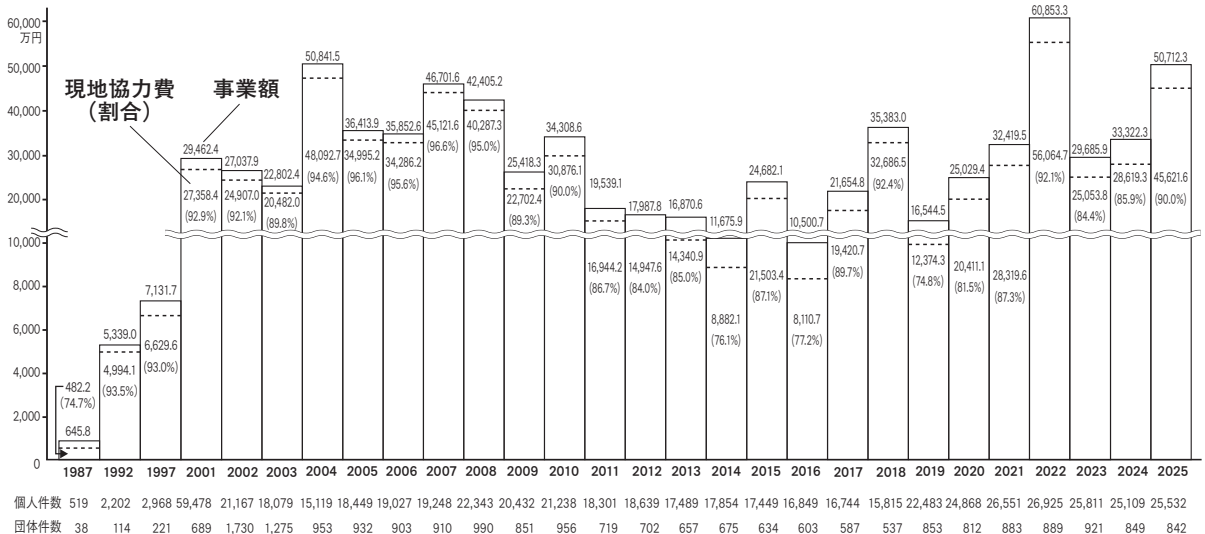
*会報発送費用の節約になっています。

●2025年度事業額 (支出ベース)

507,122,729円



事業規模(会費・寄付件数、事業額)の推移 1987～2025年度



◎現地からのレポート

期待を集めるマーマンダラ事業

PMS支援室

山下 玄

次なる水不足の地域へ

皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在滞在中のアフガニスタンでは、脱穀機が小麦畑に面した道路に何台も連なり、水冷式クーラーがバザールに現れ、果物ではスイカや桃が美味しい季節になりました。帰国までにマンゴーも食べられないか、と連日八百屋に目を光らせています。

さて、今回私からご報告させていただきますのは、今年九月の完工に向かって作業中のナージアン事業の次期プロジェクトとなるマーマンダラ事業についてです。

マーマンダラは、ナージアンおよび二〇二四年三月に完工したバラコットと同様にナンガラハル州南東部にあり、ちょうどナージアン郡とコット郡の中間のスピנגガル郡（旧アチン郡）に位置します。スピングガル山脈を水源とするマーマンド川の周辺に、本事業の対象地域となる村々が点在しています。川からの取水が可能なのはこれらの村々の上流側のみで、下流側では洪水が発生する春の約一ヵ月間以外は涸れ川となるため取水は期待できません。

地域住民は、長い間生活用水や農業用水を伝統的な地下水路であるカレーズ、湧水井戸水に頼ってきました。衛星写真上でもアリジゴクのように下流に向かって点々と伸びるカレーズの点検用の竪穴が確認でき、水は穴底の地下トンネルを下っています。

しかしながら、気候変動による気温上昇、不安定な降雨、急速に流れ下る雪解け水の浸透水量の減少などの要因で、当地域は頼みの綱であるこれらの水資源も枯渇の危機に直面しています。事実、十一ヵ所あったカレーズのうち三ヵ所を残して全て干上がってしまったそうです。また、住民による地下水の過剰取水や、畑への必要以上の灌水も水不足に更なる打撃を与えています。

以上の背景を基に、PMSは流域に多数の砂防堤を造成するプロジェクトを計画しています。村の上流側に位置する小高い山々の谷から降雨時に流れてくる鉄砲水を、谷筋の水の流れが集まる地点に設置した砂防堤で貯留させ、下流側のカレーズ、井戸、湧水のための地下水涵養を図るのです。直近ではナージアンのツールナウ、ホラガイナウ、ギーダルナウでPMSが造成した砂防堤（3写真真参照）をイメージしてもらえれば分かりやすいかと思います。

新事業の概要

マーマンダラ事業の概要を述べますと、工期は二〇二六年十月から二八年九月までの

二年間を予定しており、灌漑面積は七三六haに及びます。また、各砂防堤は毎時三〇mmの雨量まで貯留することができます。砂防堤に加えて、対象地域となる村々の三ヵ所に取水門と水路、貯水池を建設予定です。PMSはバラコットやナージアン事業において、山麓の中小河川から取水し、時々洪水や雨水、湧水とともに用水路末端の貯水池に注いで貯留させる方法を用いました。また、谷筋に蛇籠や巨礫、盛土型の砂防堤をいくつも設置し、鉄砲水の勢いを段階的に弱めて村への被害を防ぐとともに、溜まった水が徐々に浸透して下流域の地下水を涵養させる手法を、バルカシコート、ナージアン事業において実施しました。PMSが実践してきたこれらの雨水洪水の貯留、地下水涵養の技術が、マーマンダラ事業においても用いられることになります。

本事業における地域住民からの期待は大きく、計画を聞きつけた人が畑を開墾したり、家を建てたりして土地の価格も跳ね上がっているそうです。

コバルトブルーの出現

最後に余談ではありますが、今回の現地事業視察時に特に印象に残った光景をお伝えし、報告の結びとさせていただきます。

現在ナージアンにて砂防堤を造成中のギーダルナウからの帰途、下流の数km先に目を疑うほど不自然な、しかし息をのむほど美しいコバルトブルーが出現していました。

●維持管理事業 バラコットの5月●

2024年に完工し、維持管理中のバラコット用水路。スピנגアル山脈の雪解けが始まる季節と連日の雨が重なり、コット川の水量が随分と増えている。このような川の水や湧水、年に何度か起こる洪水をも末端の貯水池に貯める、という設計で造られているのがこの用水路である。写真(上)は取水門付近。ここから約4.5km先の貯水池へ、水を送り続ける。(2026年5月2日)



用水路末端にある83,000m³の貯水池が満杯になった。この水が徐々に大地に浸透し、地下水を育む。水面に映る、雪を抱いたスピングアル山脈が美しい。(2026年5月2日)

●ナージアン事業、いよいよ大詰め●



今年9月に完工予定のナージアン事業は終盤に差しかかり、現場はいよいよバゴン取水地点の工事に取りかかっている。ここでは既存用水路のかさ上げ、取水門（スライド門）の設置、湧水導水路（蛇籠）の造成とそれに伴う護岸壁の造成が行われる。下流カチコール、ミアガン地区と同様、湧水を用水路に直接送る。湧水で十分な取水量を得られるので、堰は造成しない。（2026年5月2日）



ギーダルナウでの砂防堤建設現場。建設される堤は2カ所で、貯水量はそれぞれ22,000m³。1時間あたり30mmの降雨に耐えられる設計。（2026年3月31日）



ギーダルナウの現場付近では作業員と散水車を増やして、大規模な植樹作業を展開中。5月中旬までにビエラ、ユーカリ、アカシアなど約16,000本の植樹が完了した。ナージアン事業全体の植樹数は約31,000本を超えた。(2026年5月4日)



モラヘイル用水路末端に造られた大貯水池。3月29日にアフガニスタン東部全域で豪雨があり、48,000m³の貯水容量を持つこの池は、洪水を貯水し満水となった。写真は降雨から1ヵ月後。毎日14,700m³の水が地中に浸透し、地下水を涵養している。PMSのディジタル技師は「毎日雨が降っているのと同じ効果がある!」と述べ、池を見にやってきた村人や役人たちは、大きな喜びを口にする。(2026年4月29日)

● 農業事業 ●



ガンベリ農場で行なわれた麦刈り。約40ヘクタールで、75トンの小麦が収穫された。来年の種は確保し、残りはバザールへ出荷される。(2026年5月14日)



[左上] サツマイモの育苗場。ここで伸びたツルをカットし、植え付けが進んでいる。ツルは周辺住民に配布するほか、PMSの各現場の水門小屋等にも配布し栽培する。(2026年5月6日)

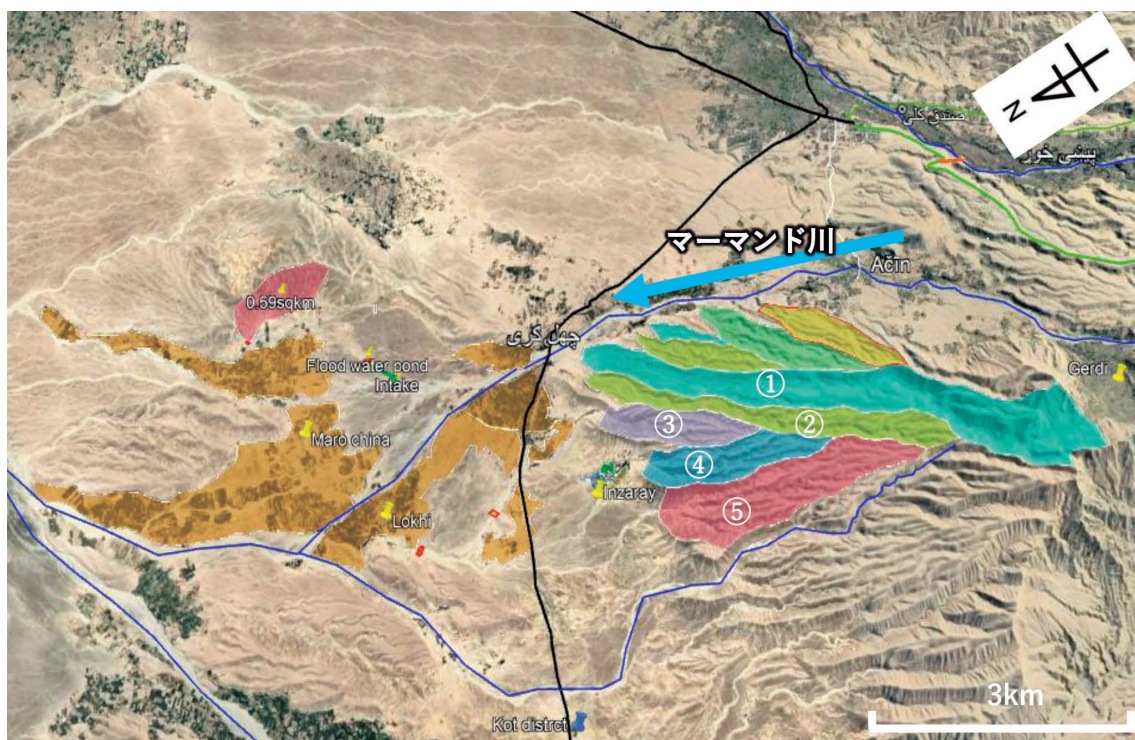


[右上] 養蜂。現在はガンベリ農場に88箱の巣箱が置かれている。昨年は約500kgのハチミツが採れた。(2026年4月19日)



[右下] 牛舎。犠牲祭（イード休暇）の前は牛の値段が上がるため、仔牛5頭がバザールへ出荷された。(2026年5月5日)

●新規事業地 マーマンダラ●



10月からの新規事業地として予定されているマーマンダラの概略地図。①～⑤はディダール技師によって示された砂防堤の設置場所となる各流域。降雨時に流れる鉄砲水は砂防堤で一度溜められ、浸透して地下水となり、カレーズ、湧水、井戸水として地域住民の生活を潤す。左側の黄色の範囲は、想定される灌漑面積736haを示している。



調査で訪れたチェルガジ村付近にある、カレーズの点検用の堅穴（写真左）。堅穴の底の地下水路を流れる水は、チェルガジ村の水路出口に通じる（写真右）。5月中旬に水量観測を行なったところ、毎秒27.5ℓの水を供給していることが分かった。（2026年4月29日）



灌漑技師 ワヒドゥラー

2020年入職。33歳。
6児の父。ファイズラー技師と同時入職で、ナー吉安事業では既存用水路改修を担当。昨年は現場の合間を縫って、地震被災地支援でも尽力。会報167号に記事掲載。



灌漑技師 ファイズラー

2020年入職。33歳。
2児の父。マルワリードII延長路、バルカシコート、バラコット事業と経験を積み、ナー吉安事業では取水口周りの工事を担当している。会報166号に記事掲載。



灌漑技師 ポーパル

2018年入職。33歳。
2児の父。中村先生の指導下で最初に任された大仕事は、ガンベリ・シギ排水路整備。ナー吉安事業では砂防堤をはじめ盛り土工事全般を管理。本会報に記事掲載 (20頁)。



PMS職員紹介

1

若手技師たち

(灌漑技師3人、農業技師5人)



灌漑チーム責任者であるベテランのディダール技師(前列右)とファヒーム技師(前列中央)からレクチャーを受ける3人(2025年12月19日)。若い世代へ少しずつながらPMS方式が伝授されてゆく。3人とも作図能力が非常に高く、手描き図面においては上司より長けているかも(?)。



農業技師 ヒダヤットウラー (右)

26歳。28歳になる頃結婚予定(?)。主に柑橘園を担当。写真は地震被災地支援時のクナール州にて。PMSの灌漑・農業・医療の各チームが通常業務と並行して、それぞれ人員を割いて支援を行っていた。



農業技師 バシヤルマル (左)

28歳。2児の父。ナツメヤシ園などを担当。中村医師も楽しみにしていた初結実は、入職年の2021年の事だった。株分けによって園は拡がり、収穫量も年々増加している。会報157号に記事掲載。



農業技師 リズワヌッラー

26歳。1児の父。ガンベリ農場の大部分を占める柑橘園での仕事はもちろん、牛舎で40頭の牛たちの飼育にも当たる。



農業技師 ラフマットウラー

30歳。3児の父。ここ数年特に力を入れているサツマイモについて、さまざまな栽培方法を試行錯誤中。会報152号に記事掲載。

農業技師 アブドゥル バシール

32歳。1児の父。小麦・米の栽培などに従事。ラフマットウラー技師と顔形が似ているが、血の繋がりはないらしい。本会報に記事掲載(18頁)。



5人同時入職した年、農業チーム責任者のアジュマル技師(右から3人目)と共に(2021年12月24日)。今年で5年が経ち、顔つきもいっそう頼もしくなった。広大なガンベリ農場で毎日それぞれの担当現場に立ち、PMSの活動を支えている。

中村先生 雨ニモ負ケズ

—ハンセン病診療への想いが叶う—

中村医師は2009年にペシャワールのPMS基地病院を閉鎖した後も、アフガンの患者の事が頭から離れなかった。以下は2010年に会報に記された、中村医師の言葉。

「(ハンセン病)診療が中断し、患者たちは行き場を失った。特に東部アフガンから来る患者のために、小さな診療施設をジャララバードに置く予定であったが、用水路工事に忙殺され、手がつけられなかった。」(会報104号より)



[左] 2025年11月1日、中村医師の名前を冠したハンセン病センターがオープンした。



アーベット看護師(中央)が持参したスライド(ハンセン病患者の塗抹検査)を顕微鏡で診る中村医師、写真右ジヤ医師(2012年3月)

◎現地スタッフからの便り

活動を始めたハンセン病センター

PMSドラエヌール診療所医師
ドクター中村記念ハンセン病センター責任者

ハフィズブラーカニ

中村医師の希望を実現

皆さま、こんにちは。

私はPMSのドラエヌール診療所、ならびにドクター中村記念ハンセン病センターの責任者で、ハフィズブラーと申します。二〇〇五年九月十六日から現在までPMSで働いてまいりました。

中村医師は一九八四年にハンセン病患者

◎重版出来！

中村哲対談集

人・水・命

ベシャワール会編／石風社刊

【対談者】徳永進／井上ひさし／池澤夏樹／鶴見俊輔／養老孟司／原寮／辰野勇／菅原文太／大澤真幸／半藤一利

今こそ中村医師の言葉を！

*詳しくは同封のチラシをご覧ください。
2025年12月刊／四六判並製1870円(税込)

◎地方出版文化功労賞受賞

中村哲 「上・下巻」

思索と行動

中村哲著／ベシャワール会発行

「ベシャワール会報」現地活動報告集成1983～2019
会報に掲載された中村医師の報告をまとめました。ぜひご購読下さい。

A5判上製上巻43頁／下巻45頁 各2970円(税込)



のための診療活動をパキスタンのベシャワールで始められました。当時同国では貧しいアフガニスタン人の患者は診療の対象とされていませんでした。つまり戦争から逃れてきた難民で治療費用を持たないアフガニスタン人の患者を診る病院はほばない状態だったのです。そこで中村医師は、アフガニスタン人だろうと、パキスタン人であろうと、人種、国籍を問わずすべての患者に平等な医療サービスを提供するため、ご自身で病院を設立することを決意されました。

活動は順調に続いていましたが、二〇〇〇年にアフガニスタン、特に東部地域が深刻な干ばつに見舞われました。この時、中村医師は干ばつへの対応が最優先と考えられ、ナンガラハル州の各地区で井戸掘削と灌漑プロジェクトを開始して、用水路建設に懸命に取り組み、農地を次々に復旧させていきました。

それらの事業を続ける中、二〇一九年に中村先生は亡くなりました。生前、先生はアフガニスタン国内でハンセン病治療を再開しなければならぬと何度も仰っていましたが、厳しい干ばつへの対策に追われていたために、残念ながらその希望は実現しませんでした。中村先生没後、ベシャワール会と主なPMS職員たちはインドで会合

行ってみると、三月から四月に降っていた雨をたっぷり蓄えたナージアンのモラヘイル用水路末端の貯水池と、そこで羽を伸ばして悠々と泳ぐ人たちと、せつかく設置したにもかかわらず最早あまり意味をなしていない「遊泳禁止」の看板がそこにありました。大貯水池から分水路を挟んで向こう側にある小貯水池は子ども用、というように自然と使い分けられており、「市民プールか」と心の中でツッコむ。

そろそろ資材リクエストとして、プール監視台と笛が朝のミーティングに上がってくるかもしれません。

次期プロジェクトのマーマンダラも、水が戻り、人と畑、木々の緑が戻れば、そんな人々の心を和ませる場所や光景が二次的に現れてくるかもしれません。期待と気合をもって、本事業に尽力してまいりたいと思います。

を持ち、中村先生がやっておられたプロジェクトは全て引き継ぎ、抱いておられた希望を必ず実現するべく力を結集しようと互いに約束しました。

そしてついにPMSとアフガニスタン公衆衛生省との間で覚書が交わされ、ナンガラハル州ジャラバードにアフガニスタン東部地域を対象とするハンセン病センターを昨年十一月一日に開設することができました。そして、診療所に必要な医療機器やその他機材が購買・搬入され、また以下のスタッフが採用されました。

- ①皮膚科医一名／②医師一名
- ③男性看護師二名／④女性看護師二名
- ⑤臨床検査技師二名／⑥薬剤師一名
- ⑦門衛二名／⑧清掃員二名(男・女)
- ⑨運転手一名／⑩料理人一名

早期治療のために

私たちの事業計画は以下の通りに進められています。アフガニスタンでハンセン病の診療経験を持つ医療従事者はPMS職員を含めても、ごくわずかしきいせん。また、地域によつては偏見の対象となつてゐる所もあります。

そのため、東部地域の多くの医療従事者に対し、ハンセン病について正しい情報を提供して診断と早期治療へ繋げることを立案し、アフガン東部各州の主な病院や診療所への訪問を実施することにしました。

まずナンガラハル州二二郡から開始し、

多くの公立・私立病院と診療所を訪問、ハンセン病の兆候と症状について説明し、中村先生が作成されたハンセン病の症例写真集を配布しました。同時にPMSのハンセン病センターの住所を伝え、紹介状の用紙も渡すようにしました。ハンセン病の疑いのある患者は当センターに送ることができます。我々に送られてきた患者には皮膚や神経などの診察を行い、ハンセン病の兆候と症状があれば、皮膚塗抹検査(BI)が行われます。今年一月後半からの病院訪問開始から現在までに、七六人の患者が当セ

種を蒔く人

PMS農業エンジニア

アブドウルバシルシャリフイ

小麦の栽培

私はシャラフディンの息子アブドウルバシルと申します。PMSの活動については誰もが知るところですが、私自身もPMSを深く敬愛し感謝しています。二〇二一年にPMSのスタッフとして採用され、当初よりPMSガンベリ農場で園芸や野菜栽培、苗床での作業など多くの仕事に従事しています。最近では、ガンベリ農場での小麦や米栽培の担当としても働いております。

ンターに紹介され、そのうち五人がBI陽性、つまりハンセン病と確定しました。病院や診療所への訪問は二チームで実施していましたが、既に関係を構築した病院等から送られてくる患者の対応が必要になり、一チームはセンターに残るようにしています。現在、訪問チームはクナール州で忙しく活動しており、その後ヌーリス州で活動予定です。アッラーの御心に沿うならば、この施設が将来はハンセン病専門の診療所から総合医療施設になることを私は心から願っております。

また、PMS全体の活動として二〇二二年の食糧支援プログラムや昨年の大地震発生時の緊急支援活動にも参加しました。

今回は、現在私が担当している小麦の栽培について報告いたします。今年は五月に麦刈りが始まり、現在は毎日脱穀作業が行われています。以下に述べる各種の種蒔き法での収量は今後の会報でお知らせしたいと思います。

ガンベリ農場の土壌は主に砂質なので、土の入れ替えや緑肥等で土壌改良を重ねてきました。このような状況下で様々な播種方法を試しています。アフガニスタンの麦蒔きは一般的に手作業で種子をばらまく伝統的な方法で行われています。PMSのガンベリ農場はじめのうちはこの方法でこなっていましたが、この方法は大量の種子と働き手が必要となります。

中村哲医師の著作等

(価格は税込)

アフガン・緑の大地計画

Peace (Japan) Medical Services & ベシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円

好評発売中!

わたしは「セロ弾きのゴーシュ」

中村哲が本当に伝えたかったこと 1760円

天、共に在り

1760円

アフガニスタン三十年の闘い

NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
☎ 03 (3464) 7311

希望の一滴

中村哲、アフガン最期の言葉

A5判192頁オールカラー 1650円

西日本新聞社 福岡市中央区天神1-4-1
☎ 092 (711) 5523

アフガニスタンで考える

～国際貢献と憲法九条～

726円

人は愛するに足り、真心は
信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 1188円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
☎ 03 (5210) 4000

医者、用水路を拓く

1980円

ベシャワールにて

1980円

ダラエ・ヌールへの道

2200円

医は国境を越えて

2200円

医者 井戸を掘る

1980円

辺境で診る 辺境から見る

1980円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
☎ 092 (714) 4838

ほんとうのアフガニスタン

1650円 光文社

文京区音羽1-16-6

☎ 03 (5395) 8116

医者よ、信念はいらないます命を救え!

1980円 羊土社

千代田区神田小川町2-5-1

☎ 03 (5282) 1211

アフガニスタンの診療所から

858円 ちくま文庫

台東区蔵前2-5-3

☎ 03 (5687) 2680

映像記録DVD

荒野に希望の灯をともし

～医師・中村哲の35年の軌跡～

[2021年発売] 2970円

アフガニスタン [16年発売] 2970円

用水路が運ぶ恵みと平和

アフガニスタン [12年発売] 2750円

干ばつの大地に用水路を拓く

[企画]ベシャワール会[製作]日本電波ニュース社



ガンベリで使用されている手動種蒔き機 (2024年6月10日)

法を簡単に述べます。

さまざまな方法
以下に、ガンベリ農場で試みている播種

●トラクターによる種散布機使用…一つの畝に深さ5cmの直線の溝を二本掘り、筋状に種子を蒔く方法です。二本の溝間は二〇～三〇cm空けます。種子と肥料を混合し、散布機を使用して蒔きます。この栽培法では、一haあたり七五kgの小麦の種子が必要です。この方法では、種子の分布が均一で、また灌漑が容易で、肥料の利用効率が向上しました。

●手動種蒔き機使用…二〇cmの間隔を空け、一つの穴に二～三粒の小麦の種子を蒔きました。この場合、一haあたり八kgの種子が最適です。この作業は最も多くの労働力を必要としますが、水やりが容易で、収率が最も上がります。

●平地での小麦栽培…幅一m、長さ七mを一区画にして、トラクターで五本の耕運ラインをつくる。ライン間隔は二〇cm。手作業でライン上に二〇cm間隔で種子を三粒ずつ蒔きます。ここでもラインごとに種子を

互い違いに蒔きました。水やりは簡単ですが、労働力が非常に必要になります。ただし、概して良好な結果が得られます。

●畝での栽培…三〇cm間隔に畝を作り、二〇cm間隔に種子三粒ずつ蒔きます。ここでも畝ごとに互い違いに蒔きました。

試験結果

従来の伝統的なばらまき法と比較して、播種機を使ったシードドリル播種法による条蒔き(一定の深さの溝を掘り種子を等間隔に蒔く)が高い収量をもたらすことが示されました。この方法は種子の消費量を削減し、農場管理を容易にすることが分かりました。さらに、養分と水分が適切に満遍なく行き渡るため、作物はより均一かつ健全に生育します。ガンベリ農場での実験は更に積み上げる必要がありますが、アフガニスタンの主食である小麦の質と生産性を向上させ、不要な経費を削減できるのではないかと考えて

います。アフガニスタンは農業国です。私はガンベリ農場での研究と経験を重ね、適切な播種方法、栽培方法を生産者に推奨し

持続可能な発展の生きた証

PMS灌漑プロジェクト

ポーパルハミダビ

私はポーパルと申します。二〇一八年からPMSでワールドエンジニアとして勤務しており、これまで数多くの灌漑事業および資源管理事業に携わってまいりました。現在は、ナージアン郡のギーダルナウで砂防堤の造成に従事しております。

二〇二五年八月に大和技師、ディダール技師、ファヒーム技師とともにギーダルナウを視察し、現地調査と技術的評価を実施しました。この工事で私は地形測量と砂防堤設置の監督を担当しました。私は誠実さ、献身、そしてプロ意識をもってこの計画を引き受け、日々の業務に取り組んでいます。ギーダルナウはかつて、アフガニスタンの伝統的なカレーズ（地下用水路）と天然の湧水により人々が生活し、農地を耕していた地域でした。しかし、時が経つにつれ、カレーズと湧水の流量は徐々に減少し、ついにほぼ枯渇しました。水不足のため多く

て行きたいと思っています。そしてPMSでの仕事に満足しています。日本の皆さまに感謝を込めて。

の住民が家を追われ、広大な農地が放棄されました。

砂防堤の工事を始める際、最初に重要だったのは良好な凝集性と優れた圧縮特性を持つ適切な粘土質の土壌を特定することでした。周辺地域を調査した結果、適切な土壌が見つかり、工事を開始しました。

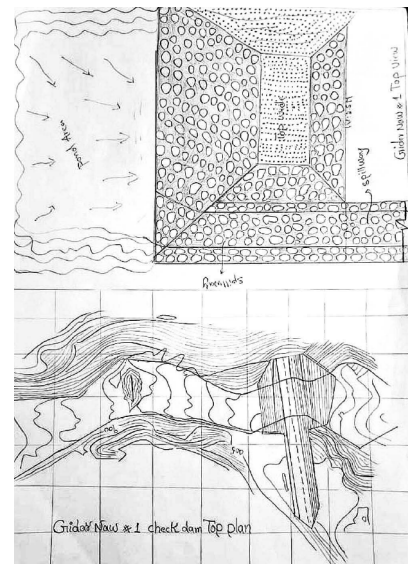
工事期間中、この地域は三度の豪雨に見舞われ、鉄砲水が発生しました。洪水は工事途中の砂防堤に貯留され、それから六日の間に水が徐々に地中に浸透しました。結果として地下水が涵養され、カレーズと湧水の水量が大幅に増加したことで、下流側で細々と畑を耕していた住民の家族は希望を取り戻し、村に戻って農地の耕作を再開しました。

砂防堤の工事にあつたての工法的特徴は、適切な含水率で厚さ二五cmごとに土を敷き詰めて施工するというものでした。各層は丁寧に均され、次の層を敷く前に、コンパクター（転圧機）で八回締め固めて必要な密度にしました。平均して毎日約二〇人の作業員が従事しています。

また、この工事現場周辺に合計二万本以上の苗木が植えられました。そのうち六〇％はビエラの苗で、残りの四〇％はキーカ

ル（アカシア）、ユーカリ、グラスキ（ハウチワノキ）です。ナンガラハル州では大量のビエラの苗木が入手できなかったため、隣のラグマン州までファヒーム技師が足を運び、念入りに確認して調達してきました。気候変動の悪影響を軽減する小さな一歩にもなるのではないかと期待しています。

今日、ギーダルナウは単なる砂防堤の工事にとどまらず、希望と環境の再生、そして持続可能な発展の生きた証となっています。かつて干ばつに見舞われ放棄されていた地域は、水、農業、そして人々の活動の復活とともに、息を吹き返し始めています。この事業は、技術的な専門知識、誠実さ、そして地域社会の協力が結びつくことで、最も乾燥した土地でさえも緑豊かで豊穡な環境へと変貌させられることを示しています。PMSの活動をご支援くださる日本の皆さまに感謝申し上げます。



ポーパル技師が描いた砂防堤の図面

◎理事就任のご挨拶

自立への伴走者として

ペシャワール会理事／元ワーカー

中山博喜

「縁の下の力持ちになってくれんね?」

日頃からペシャワール会の活動を温かく支えてくださっている皆様。「はじめまして」の方も、「大変ご無沙汰しております」と懐かしうご挨拶すべき方もおられるかと思ひます。

私はかつて、二〇〇一年から〇六年までの五年間にわたり、ペシャワール会の現地ワーカーとして活動しておりました。現地へ赴く発端は「一緒に井戸を掘らないか?」というお誘いでしたが、いざ現地に足を踏み入れてみれば、PMS病院の地下オフィスに籠もって、皆様から頂いた大切なお金を現地活動へ最も有効に届けるための業務に没頭していました。中村先生に問いかけられた「縁の下の力持ちになってくれんね?」という言葉に鼓舞されて奔走していた日々を、今も懐かしう思ひ出します。

時には会報に寄稿することもありましたが、基本的には裏方仕事。現地スタッフたちと一緒に、引き出したお金に偽札がないか

チェックしたり、そうしてお金を触り続けた手で鼻をほじったら顔が腫れてしまったりと、何とも間抜けな記事ばかり書いてしまったものだと思ひしています。しかし、送られてきた資金を最も無駄なく効果的に現地の人々のために活用できる方法を暗中模索してひたすら考え続けた日々、その地下での毎日こそが、現地での活動を足元から支える原動力だったと確信しています。

私たちの究極のゴール

この度、私を含めて三人の元現地ワーカーが、ペシャワール会の「理事」という新たな立場で活動の現場へと戻ってまいりました。帰国後はそれぞれ異なる仕事に就きましたが、ペシャワール会が発足して四〇年が過ぎる中、会のこれからの発展を願う上で、現地で中村先生の背中を見てきた我々に何かできることがあるのではないかと、改めてご縁を頂きました。

ただ、ここで「ペシャワール会のこれからの発展を願う」と言うことには違和感や矛盾があるのも事実です。なぜなら、私たちの究極のゴールは、「ペシャワール会という支援組織が、全く必要でなくなること」だからです。私たちが支援をしなくても、共に汗を流して協働してきた現地のメンバーたち、そしてアフガニスタンの全ての人々

が自立し、自分たちの力で平和に豊かに暮らせるようになること。これこそが中村先生が命を懸けて目指した理想であり、私たちの目指すべき終着点に他なりません。ゆえに、これからの私たちの活動は、「いかにしてペシャワール会が機能しなくて済むようにするか」を現地の人々と一緒に考え、その自立への過程を共に歩んでいくことなのだと思います。

かつて中村先生が示された「一隅を照らす」という言葉を、今、改めてしみじみと



赴任当時の中山さん(右から7人目)

噛みしめています。世界の片隅であっても、与えられたその場所で一人ひとりが光となり、身の回りを照らしていく。私たちはペシャワール会の一員として、アフガニスタンの人々が自らの力で未来を切り拓いてい

く道程の伴走者であり続けたいと、決意をもって活動に参加してまいります。彼の地の自立に向けた次なる一步を、今後とも温かく見守り支えていただけますと幸いです。

◎中村哲医師アーカイブ

アフガニスタンから命問う

※「西日本新聞」(二〇一四年七月六日)より

——現地活動三〇年時のインタビュー——

アフガニスタンで人道支援を続ける非政府組織「ペシャワール会」の現地代表で、PMS(平和医療団・日本)総院長の中村哲医師(六七)が現地活動を始めて三〇年がたった。ペシャワール(パキスタン)でのハンセン病患者の医療支援を皮切りに、井戸掘り、空爆下での食糧配給、農地再生に向けた用水路建設などの活動を展開。戦乱の地で、人と自然に向き合い続ける中村医師の歩みを振り返った。

＊

——活動の原動力になつてきたものは何ですか？

大和魂でしょうか。「義を見てせざるは勇無きなり」(論語)。始めたら逃げるに逃げられなくなつた。

昔は論語とか持ち出さずとも、心意気と言えば理解されました。困っている人がいれば見捨てられない、とみんな思っていたし、良いことだ、かつこいい、と信じていた。

今の人は動機をあまり問わないし、説明してもなかなか分かつてもらえない。日本人の気持ちが変わってきたんじゃないでしょうか。

——「誰も行かない所でこそわれわれは必要とされる」が原点ですね。

私は九州しか知らない。(出身地の)福岡県も詳細に知らないの、世界で、とはいきません。ペシャワール会の活動は国際協力というよりは九州—アフガニスタン東部という地域間協力と呼ぶ方がふさわしい。

国際非政府組織(NGO)とは対極にあ

って、アフガン東部という地域でじっと活動してきたのがよかった。国際NGOのようにソマリア、カンボジアと支所を持って転々としていたら、欧米を中心とした世界標準とかに振り回され、現地のニーズに合った事業を展開できなかったでしょう。

——アフガニスタンから見えてきたものは？
アフガンでは人類が経験したことのない気候変動が進行しています。かつて一〇〇%だった食料自給率は、長い戦乱に加え、二〇〇〇年から顕在化した大干ばつによって半分程度にまで落ち込んだ。農民が人口の九割を占めているので死活を分ける問題です。食料自給をどうするのか。自然からの収奪行為は限界に達しています。戦どころではないですよ。

日本は依然、欧米崇拜、脱亜入欧で、その弊害が大きい。経済成長、消費拡大、投資の余地は既になくなったのに、今も「成長教」にとりつかれている。

原発が危ない、と言いがら、みんな快適な生活を手放さず、消費欲望を膨らませている。満腹なのに食欲増進剤を注射しているようなものです。

せめて消費を減らし、成長ではなく現状維持のために立ち止まるべきです。

世の中に大事なモノはそんなにありませんよ。貧乏でも不幸ではない、と気づくべきです。

必要なもの unnecessary のものは何か、制御できるもの制御できないものは何か、そろそろみんな冷静に見極めたらどうでしょうか。――安全はどのように確保してきましたか？

かつて診療所を造るときライフル銃で武装集団に襲われたことがあります。備え付けの機関銃がありました。私たちは決して撃ち返しませんでした。殺したら殺される、報復の連鎖が始まると知っているからです。これまで非暴力に徹し、敵をつくらないようにしてきました。政府、反政府、タリバンと立場に関係なくお付き合いできてきました。

憲法九条も私たちの活動を守ってきたと言えます。アフガン人はヒロシマ、ナガサキのことを知っており、戦後復興を遂げた後、「平和国家」「海外に戦力を送らない国」として歩んできたイメージによって日本を尊敬しています。

米同時多発テロの後、日本はアフガンを空爆した米国の同盟国としてインド洋で給油活動をしました。これもアフガンでは知られていますが、制服を着た自衛隊がどこかと現地に入ってきたわけではない。そうでなかったなら私たちはどうなっていたか。今回のアフガン戦争には欧米の二十数カ国が参加しました。ようやく米軍も撤退するというが、敗北です。現地に混乱と外国に対する敵意を残して去るのです。その中

で日本に対する感情はまだ特別です。現在事務所を置いているジャララバードに在住する外国人が私一人ということがそれを証明しています。

――過酷な活動に耐えられてきた。健康法は？

汗して働くこと。河川の仕事を始めてから一日に二万歩、三万歩を歩くので健康になりました。そして早寝早起き。電気を大切にするので、お日さまとともに起きて寝ます。食事は「腹八分」。現地の庶民が食べるものを食べていけば大丈夫。豆類、野菜、果物が中心で、肉は週に一回食べられればいい方。肉は鶏が最も高価で、次が羊、牛は安い。用水路ができてからはマス、ウグイなどの魚も食べます。仕事で大量に汗をかくので塩も必須。現代日本の減塩とかとんでもない。

――これからの取り組みは？

二〇〇三年から進めている「緑の大地計画」は現在、アフガン東部の穀倉地帯の一角、一万六五〇〇ヘクタールで暮らす六五万人の農民たちの生活空間を確保し、ひとつの復興モデルを完成しつつあります。

この総合的な農村復興事業では、地域の自然条件や文化を尊重しつつ、繰り返される干ばつ、洪水を克服するために、江戸時代から現在でも活用されている日本、九州の伝統的な土木・河川技術を採用しています。

当面はこの復興モデルを確立させたい。そして、あと何年かかるか分かりませんが、復興モデルをアフガン各地に普及させていきたいと考えています。

▼現地活動を紹介するパンフレットを送ります

*ベジャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四つ折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さった「寄付」については税金控除の対象となりません。予めご了承下さいますよう、お願い致します。

*会費、寄付をご入金される際は、払込用紙の受領ハガキ欄の「要・不要」のどちらかに○印をお願い致します。

PMSの動き

2月17日～3月18日 ラマダン期
(断食月)

3月19日～22日 小イード休暇

3月21日 ノーローズ（イスラム
暦元日）

4月15日～6月1日 PMS支援室
員がジャララバード事務所に
滞在

5月2日～24日 ガンベリ農場で
稲刈り

5月26日～30日 大イード（犠牲
祭）休暇

●事務局だより

＊向暑の候、皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。今年も酷暑が予想されております。ご自愛をお願いいたします。

六月六日にベシャワール会の総会と現地報告会を開催しました。報告会では、アフガニスタンから帰国したばかりのPMS支援室員が最新の状況を伝えました。さらに、昨年八月末の大地震に対する救援活動も詳しく報告されました。二〇二五年度の会計報告にありまますように、皆さまから多大なご支援をいただいております。そのおかげで、迅速な救援活動が可能となりました。改めて厚くお礼申し上げます。報告会の映像をホームページで公開しておりますので、どうぞご覧ください。

＊2頁に掲載した中村医師の漢詩は、マルワリード用水路沿いに植えられた柳が育ったころの作と思われます。最初の二句は王維の詩「渭城の朝雨輕塵を過す 客舍青青柳色新たり」を踏まえています。中村医師は「細かい砂漠の塵で覆われる内陸の乾燥地帯は、時折朝方に霧雨が下る。雨が去ると空気が澄み渡り、木の葉の緑が鮮やかに表れる」と述べています（会報一四二号）。二〇一九年までの柳の植樹は六〇万本、昨年度は一六五〇本が植えられました。今後もPMS活動地の各所で美しい緑が人々の心を和ませてくれるでしょう。

＊博多湾内に能古島という小島があります。博多駅から一時間以内で行くことができる風光明媚な島です。その島の「能古博物館」別館一階に、中村医師の足跡を写真やDVDで伝える常設展示がなされています。開館日をご確認の上、どうぞお出かけください。

●PMS支援室より

＊ハンセン病センターが忙しくなってきました。職員たちはハンセン病が疑われる場合の視診、触診、筋力検査や菌検査等のトレーニングを終え、今年一月中旬から、ナンガラハル州の一三〇カ所以上の医療機関を訪問してきました。

私たちがジャララバードに到着した四月、まだ一人もハンセン病患者が見つかっていない事に驚いた。

医療機関訪問にあたっては、皮膚科外来診察に同席し、ハンセン病が疑われる場合は診察をさせてもらうという計画であった。しかし、外來に同席させてくれる所はごくわずかだったため、もう一つの目的である医療従事者へのハンセン病の啓蒙に力を入れ、症例集を配布し診察法を伝えた。そして疑いのある患者はPMSへ送るよう道筋をつくり、ナンガラハル州二郡の訪問を終えた。現在クナール州十六郡を、その後はヌーリス州、ラグマン州を予定している。彼らの地道な働きの結果、現在各地から七二人が紹介されてきた（ハンセン病ではなかった）。そんな中、ダラエヌール診療所から三人の患者が送られてきた。うち二名は菌検査が陽性で、一人はすでに右眼を失明していた。今まで診断がつかず多くの医療機関を転々としていたらしい。

アフガニスタンではハンセン病の診療に携わった医療関係者が極端に少ない。ハンセン病センターの重要性を再認識している。次号に詳細を報告予定。

◎村から

＊中村先生がアフガニスタンに入られてヒンズークシュ山脈の麓で医療活動を始められた一九八六年頃、私はその東側に連なるヒマラヤ山脈の麓でネパールの人達にセメント工場の運転とマネージメントを教えていました。

ネパールはアフガニスタンと同じくらい貧しい国で、子供達は病気や栄養失調で三歳になるまでに多くが命を落としていました。ベシャワール会にアフガニスタンの裸の子供が這いつくばって水溜まりの水を飲んでる写真がありますが、私も同様の光景をネパールで目の当たりにしていました。

でも私は中村先生と違って、その現実を目の前にしながら何もできなかった（否、何もしようとしなかった）という負い目を今も抱えています。そのようなことから、退職したら是非ベシャワール会でボランティアをさせて頂きたいと思っていました。

その念願がかなってもうすぐ五年になりますが、これからも自分ができることをできる範囲でお手伝いさせて頂ければ幸いです。

(一)

会 則

①本会の名称をベシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州（現カイバルパクトウンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局を

〒八一〇―〇〇〇三 福岡市中央区春吉一―一六八 VEGA天神南六〇一
TEL 〇九二―七三一一―三三七二
内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。